

いじめ—1

いじめについては近年頻繁に話題になっているが、殆どは学校のいじめである。最近話題になり始めた職場などのいじめ、パワーハラスメント（Power Harassment＝地位や権力を利用したいじめ）は、どこの会社にもあったのではないだろうか。私も約40年の会社生活の中で、深刻ないじめに遭った経験がある。これは2回経験したいじめの一つである。

以前に何度も書いているが、我が社は1976年にカタールからエチレン装置のオフサイト工事を受注し、その時初めて私はマネジメントの一員としてそのプロジェクトに参画した。プロジェクトマネージャー（略してPM）は私より3歳年上のKさんだったが、プロジェクトの最初にこんな注意を受けた。

「今度我々の直属の上司になるFさんは非常に優秀な人ではあるが、好い加減なことは絶対に許さない本当に恐ろしい人だから注意しろ。特にプロジェクトの初めに、そのプロジェクトの概要について徹に細に細に質問してくるので用意していた方がいいぞ。」

Fさんと云うのは国際事業本部の本部長であるが、元は土建部門出身の非常に数字に強い方で、切れ者だと言う評判の一方、怒らせたら決して許すことをしない恐ろしい人であると言うことも聞いていた。あるプロジェクトの採算を検討する会議でコスト担当者であるTという先輩が、Fさんの質問攻めにあい答えて窮して泣き出してしまったのに、Fさんは「泣いたって許しません。この答えを出すまで今すぐ調べて今日中にここで答えなさい。」と言って彼を許さなかったと言う評判を聞いたことがあった。

カタールのプロジェクトでも最初の予算設定会議でコスト担当者がFさんの質問攻めにあい、Tの時のように泣き出しそうになっていた。Fさんに「このパントリールームって何のことですか？」と詰問口調で質問された時、その担当者が答えに窮して「パントリールーム（本当の意味は「食器室またはお茶室」のこと）ではなく、パンティールームの間違いです。」と言ったので参加者全員が大笑いとなり、Fさんは「少し質問がきつ過ぎましたね。」と反省して予算を認めてくれた経緯があった。

カタールのプロジェクトが開始して半月ほどたったある日、我々のプロジェクトチームの秘書をしている女性から私に「Fさんから電話がありすぐ来てほしいと言っていますけどどうされますか？」と言われたので、私からFさんに電話して、「今お客さんから会いたいと言われているので1時間後にお会いしたのですがお待ちいただけませんか？」と嘘をついたが、待ちますと言う返事を頂いた。

このことがPMのKさんが言っていた試練だと直感したので、私はその1時間

に受注したばかりのプロジェクトの概要、受注金額、その内訳、人件費、設計に要する時間数、建設現場の広さ、使用される配管のトン数、鉄骨のトン数、打設するコンクリートm³数、等々を必死になって暗記し、数字は掌にペンで書き、一夜漬けならぬ1時間漬けでFさんとの会談に臨んだ。

びくびくしながら本部長室に入ると、Fさんが笑顔を浮かべながら「奥山さん、持ち物をそちらにおいておかけになってください。」と慇懃（無礼）に椅子を進めてくれた。つまり参考資料などは見てはいけないと言うつもりらしい。Fさんは秘書に「暫く電話をつながないで、それから重要なお話があるので他の人も入れないでください。」と命じて、本部長室の扉を閉じて私の向かいに座った。警察の尋問と同じである。

Fさんは開口一番、「カタールの仕事は今回が初めてであり、私は中近東の仕事の仕組みを知らないので、特にエージェントの役割を教えてください。」と質問してきた。カタールのエージェント制度については現地調査を行ったときに現地の日本の商社の代表に会い、詳しく聞いていたのですらすらと説明できた。カタールの仕事をするとき外国の会社は直接カタールの王様（エミールと言う）と折衝することは出来ないで、エージェントを通して仕事をしなくてはならない。エージェントと言うのはカタールの6つある地方の種族の酋長である。エミールは各種族に公平に仕事を与えないと謀反を起こされるので、国家プロジェクトにはこのエージェントを割り当て、彼に契約金額の3%の口銭を払うことを義務付けていた。我が社のカタールの仕事の受注金額は約300億円だったので、エージェントの口銭は9億円となり、彼はこれを自分の一族郎党に分配することになっている。

「良く調べましたね。次にこのプロジェクトのマンアワー（MH）がどれ程になるか教えてください。」ホーレ、お出でなすった。マンアワーと言うのは設計や調達、建設に要する人件費の元になるエンジニアの労働時間数の事であり、エンジニアリング会社の一番大きな収入源である。掌の虎の巻を見るまでもなく、暗記している数字、218,350MH（出来るだけ端数まで言うと信憑性が増す）であるが、客先がフランス人でコミュニケーションが複雑になるので15%程度増える見込みであると答えた。「そーですか。良く調べていますね。」合格。

「この仕事の配管のトン数はどのくらいありますか？」我が社の人間はこの配管トン数で大体その仕事の規模がわかる指標である。私は掌をチラッとみて「全体では3,400トンと大きな数字ですが、オフサイトと言う性格上、ヤード配管

(装置の中の複雑な配管ではなく、装置の外を走る比較的単純な配管)なので、普通のプラント内の配管よりは単純です。」冷や汗を流しながらもこれも合格。

今度はFさんの得意分野の土工工事についての試問である。F「打設するコンクリートのm³数はどのくらいですか?」。私「はい、普通のプラントに比して非常に大きく123,000m³です。」。F「配管のトン数に比べて多すぎませんか?」。私「確かに多いのは、海水の取水設備が非常に大きいからです。その取水設備だけで84,000m³もあるからです。」。F「どんな構造でそんなに大量のコンクリートを使うのですか?」。私「はい、1辺が50mの野球のベース版の形で深さ30mのプールの形をした水槽の中に3種類のフィルターを組み込んだもので、プールの壁の厚さは約2mあります。」F「どうしてそんな大きなプールが必要なのですか?」。私「お客さんの指定です。」。F「そんな非常識なプールをどうして受けたのですか?」。私「むっ。断れませんでした。何故ならそれはお客さんの要求だからです。」。F「そうですか。仕方ありませんね。」。もうその頃には私の背中を冷たい脂汗が流れ始めていた。

F「次はコンクリートに入れる鉄筋の量を教えてください。」。任せておいて下さい、ちゃんと調べてきてありますから。掌の虎の巻を見たら、な!、何と脂汗でインクが流れてしまって何も見えない。F「どうしました?」。ええいっ、ままよ。あてずっぽうに言っちゃえ。私「約43,000トンです。」。F「常識的に考えて少なくありませんか?」。私「カタールの土地は酸性が強く、鉄筋が腐食されるので普通のコンクリートより鉄筋の被りを多くするよう指定されているからです。」。F「そんな規定がどこにありますか?」。私「お客さんの仕様書です。私は専門的に説明できないので専門部を連れて説明に上がりましょうか?」。Fさんにしたって、他人の説明の揚げ足を取ろうと躍起になっているのが、その額に浮かんでいる汗が物語っている。私は、こうなったら根競べだ。徹底的に戦って負けたら「ちゃぶ台をひっくり返してケツをまくってやらあ」、という気持ちになり、全身汗だくになりながらもFさんを睨み付けていた。

その後もまだFさんはネチネチと何とかして私が音を上げないかと尋問口調で細かなデータについて質問したが、私だってやけっぱちになりながら、嘘八百ではないとしても、口から出まかせをまくし立てた。もうその頃にはFさんも、勿論私もフラフラの状態、両者とも言っていることが支離滅裂になっていたが、両者とも倒れずにまだパンチを繰り返していた。

すると、ふっとFさんの顔が柔和になり、例の慇懃無礼な態度で「奥山さん、

短い時間で（ということは私が予習することは分かっていたんだ。）良く調べましたね。これで私も安心しましたので、お仕事頑張ってください。」と言って、扉を開けてくれた。私は自分が座っていた椅子の尻の下が汗で濡れていた上に、立ち上がろうとしたときに足に力が入らなくてよろ一としたが、どうにか本部長室を出て、自分の席までたどり着いて、どーっと椅子に倒れ込んだ。それを見たPMのKさんが側にきて、部の秘書に命じて取り寄せてくれたデカイバスタオルを差し出しながら労をねぎらってくれた。私は汗と涙をゴシゴシとバスタオルで拭きながら、秘書の持ってきてくれた冷たい水を3杯お代わりした。

無事にFさんの試験に合格して、その後彼からのいじめはなかったが、彼は私が数字をでっちあげることが出来るのを見抜き、その後度々本部長室に呼び出され、慇懃無礼に「明日の役員会で発表する、今年度のコンピューターの使用料を部ごとにまとめて出してください。」等と私の仕事に全く関係のない資料作りまで命じられるようになった。彼に呼ばれるのはいつも帰り際で、明日までと言う注文だったから、自分の中でその注文をこう解釈した。つまり、明日までに作れるような資料の精度はごく大雑把で良いのだ、その数字に責任を取れと言われたら「ちゃぶ台をひっくり返してケツをまくってやらあ」と言う大胆な考えで、翌朝堂々とそれを提出した。「その数字の根拠はなんですか？」と聞かれたら、一部は専門部署からヒアリングで得たものですが、それ以外はSWAGです、と答えた。SWAGと言うのは、当時一緒に仕事をしていたアメリカ人から聞いた、日本語で言う「どた勘(あてずっぽう)」の意味で、**Scientific Wild Ass Guesses** (科学的な野生のケツが推測する、の略)、という下品な言葉であるが、アメリカ人は好んで使う。だから私もFさんにその旨を伝えた訳である。つまり根拠なんてないよ、と堂々と宣言したが、Fさんにしてもそんな短時間で精度の高いものが出る訳がないことぐらい承知していたので、SWAGを働かせることができる私を重宝がったのだと思う。

いじめの本質は、自分がいじめられる前に他人にいじめを見せつけておく行為だと思う。いじている本人が一番いじめを怖がっているのである。だから自分より強大な力を見せつけられると、いじめを止めてしまうのである。Fさんの場合も、私を見て「こいつに咬み付かれたら只じゃ済みそうにない」と思ったのではないだろうか。

あー、嫌だ、嫌だ。いじめるのも、いじめられるのも。

完